

『資本論』の論理——貨幣または商品流通——(2)

川崎 誠*

(承前)

第一節「価値の尺度」の論理

『資本論』「貨幣または商品流通」章の第一節「価値の尺度」は、『大論理学』本質論第二編「現象」の第三章「本質的相関」「A全体と諸部分との相関」と論理的に対応する。以下では、はじめに『資本論』の叙述をパラグラフごとに掲げ、それに対応する『大論理学』の叙述を引いた後、二つのテキストの論理的対応を説く。

(1) 私は、本書のどこでも、ことを簡単にするために、金を貨幣商品として前提する。Ich setze überall in dieser Schrift, der Vereinfachung halber, Gold als die Geldwaare voraus.

<大> A全体と諸部分との相関 1パラグラフ 第1文

本質的相関は第一に現実存在の自己へと反省した自立態を含んでいる Das wesentliche Verhältnis enthält *erstens* die *in sich reflektierte* Selbständigkeit der Existenz;

言うまでもないことだが、「貨幣または商品流通」章は前章「交換過程」を承けている。そこで読解を開始するに先立ち、「交換過程」章の最終パラグラフ（16パラグラフ）をも見ておこう。

<資> われわれが見たように、すでにもっとも簡単な価値表現、 x 量の商品 $A=y$ 量の商品 B においても、他の一つの物の価値の大きさがそれによって表わされる物は、その等価形態を、この関連 *Beziehung* から独立に社会的自然属性としてもっているかのように見える。われわれはこの虚偽の外観の確立を追求した。一般的等価形態が、ある特殊な種類の商品の自

*専修大学経営学部教授

然形態に癒着したとき、あるいは貨幣形態に結晶したとき、この外観は完成する。他の諸商品がその価値を一商品によって全面的に表示するので、その商品ははじめて貨幣になるのだとは見えないで、むしろ逆に、その商品が貨幣であるからこそ、他の諸商品はその商品で一般的にそれらの価値を表示するかのように見える。媒介する運動は、それ自身のうちに消失して、なんの痕跡も残さない。諸商品は、みずから関与することなく、自分たち自身の価値姿態が、自分たちの外に自分たちとならんで実存する一商品体として完成されているのを見いだす。金や銀というこれらの物は、地中から出てきたままで、同時に、いっさいの人間の労働の直接的化身 *die unmittelbare Inkarnation* なのである。ここから、貨幣の魔術が生じる。人間の社会的生産過程における人間の単なる原子的なふるまいは、それゆえまた人間の管理や人間の意識的な個人的行為から独立した彼ら自身の生産諸関係の物的姿態は、さしあたり、彼らの労働生産物が一般的に商品形態をとるという点に現われる。だから、貨幣物神の謎は、目に見えるようになった、人目をくらすようになった商品物神の謎にほかならない。

そこでこれを承け、「貨幣物神の謎」を解明しようというのが「貨幣または商品流通」章である。さて前章の最後「貨幣物神の謎は、目に見えるようになった、人目をくらすようになった商品物神の謎にほかならない」に関わっては、ソシュール『一般言語学講義』——以下『講義』——の挙げる言語事実を参照しておこう。これにより貨幣物神と商品物神との連関が明らかになるだろう。

<講> 共時論的真理は通時論的真理とははなはだしく一致するところから、ひとは両者を混同したり、折半するのはよけいだと断じたりする。……（中略）……例：初頭的でない開音節におけるラテン語の短音 *a* は、*i* に変じた：*faciō* とならんで *conficiō* があり、*amīcus* とならんで *inimīcus* がある、というふうに。ひとはしばしばこの法則をつぎのようにも言い表わす：*faciō* の *a* は *conficiō* では *i* となる、なぜならそれはもう第一音節にないからである、と。これは精密でない：いまだかつて *faciō* の *a* が *conficiō* において *i* と「なった」ためしはない。真理を建てなおすには、二つの時代と四つの辞項を識別せねばならない：ひとはさいしょ *faciō* - *confaciō* といった；ついで *confaciō* が *conficiō* と変容し、*faciō* のほうは変化をうけず存続したので、*faciō* - *conficiō* といったのだ、つまり：

faciō ← → *confaciō* A 時代

↓ ↓

faciō ← → *conficiō* B 時代

もし「変化」が生じたとすれば、それは *confaciō* と *conficiō* とのあいだである；ところが規則のたてかたがまずいので、この第一の事実さえもあげていない！ つぎに、この・当然通時論的である変化とならんで、第二の事実がある、これは第一のものとはまったく別物であって、*faciō* と *conficiō* とのあいだの純然たる共時論的対立にかかわる。ひとはややもすれば、それは事実ではなくて結果であるという。しかしながらそれはけっこうその秩序における事実であって、およそ共時的現象はすべてこの性質のものである。対立 *faciō* - *conficiō* の真の価値を認めることを妨げるものは、それがたいして意義をもたないことである。しかし対 *Gast* - *Gäste*, *gebe* - *gibt* を一考に及ぶならば、これらの対立もまた、音韻進化の偶生的結果でありながら、しかも共時論的事実において本質的な文法現象を組み立てずにはおかなく、わかるであ

ろう。これら二つの秩序の現象が、両々あい規定しつつ、他の点でかたく結びついているところから、ひとはそれらを識別しがたいものと決めてしまった；じつは、言語学は両者をここ数十年間混同してき、その方法の無価値なことを悟らなかったのである。(p. 135)

「*faciō* の *a* は *conficiō* では *i* となる、なぜならそれはもう第一音節にないからである」、こうした「法則」もまた「虚偽の外観の完成」において立てられる。というのは、「いまだかつて *faciō* の *a* が *conficiō* において *i* と「なった *devenu*」ためしはない」のだから。一方、ここでも *confaciō* → *conficiō* の「通時論的变化」は目に見えない *unsichtbar*。『講義』は説いている。

＜講＞ 通時言語学は……（中略）……同一の集団意識によって知覚されず *non aperçus*・かつたがいのあいだに体系を形づくることなくつぎつぎと置きかわる継起的辞項をむすぶところの関係を、研究する」。(p. 139)

他方、「*faciō* と *conficiō* とのあいだの純然たる共時論的対立」は「目に見えるようになった、人目をくらますようになった謎 *das sichtbar gewordne, die Augen blendende Räthsel*」として現われる——目をくらまされた結果の「法則」である——。それが「謎」と謂われる理由もまた『講義』に説かれる。

＜講＞ 通時論的事実は、なんらある価値をべつの記号をもってしるすことを目的とするものではない：*gasti* が *gesti, geste* (*Gäste*) となったという事実は、実体詞の複数をねらったものではない；*tragit* → *trägt* では、おなじウムラウトが動詞屈折に作用している、といったぐあい。それゆえ、通時論的事実はそれじたいのうちに存在理由をもつ事件であって、それから生じうる個々の共時論的帰結は、それとはぜんぜん無関係のものである。(p. 119)

confaciō → *conficiō* についても同じことである。通時論的事実 *confaciō* → *conficiō* は「*faciō* と *conficiō* とのあいだの純然たる共時論的対立」とは「ぜんぜん無関係 *complètement étrangère*」である。ところがその無関係な両者が関係づけられて「共時論的帰結」を生む。だが無関係な両者がなぜ関係するのか、「謎」である。

『講義』はこの「謎」の解をも与える。

＜講＞ 言語というものは、われわれがややもすれば抱きたがる謬想とはうらはらに、表現すべき概念を顧慮して創造され・配備された機構ではない。われわれはかえって、変化から生じた状態は、それがあらたに取り込んだ意義をしるすべく運命づけられたものではない、と見るのである。ある偶生的状態が与えられた：*fōt* : *fēt* が、するとひとはこれを、単数・複数の別を立てるために流用するのである；*fōt* : *fēt* は *fōt* : **fōti* に比べてべつに出色のものとも思えない。おのおのの状態において、与えられた資料に魂が吹きこまれ、活が入れられるのだ。(p. 120)

faciō : *conficiō* も *faciō* : *confaciō* に比べてべつに出色のものとも思えないのであって、*conficiō*

という「与えられた偶生的状態」が「純然たる共時論的対立」に「流用」される、それが *faciō : con-faciō* であった。「与えられた資料に魂が吹きこまれ、活が入れられる *l'esprit s'insuffle dans une matière donnée et la vivifie*」のだから、これすなわち「魂」（本質的な文法現象）の「受肉（化身）*incarnation*」である。

後の便宜のために、さらに類推的創造にまで視野を広げてみよう。類推は音韻変化と並ぶ言語進化の一大要因である。

＜講＞ 「類推」現象の一部は、新形が出現するのをみる前に、そっくり完成しているのである。与えられた単位を分解する言語活動のたえまなき活動は、慣用に即した口話のすべての可能性のみならず、なおまた類推的形成のすべてのそれをも内含している。それゆえ創造が現われた瞬間にはじめて産出過程が生じるとするのは誤りである；その要素はとうに与えられている。わたしがいま *in-décor-able* のような語をこの場で作ったとすれば、それはすでに言語のなかに陰然と存在するのである；そのすべて要素は、*décor-er, décor-ation ; pardonnable, maniable ; in-connu, in-sensé, etc.* のような統合のなかに見出される；(p. 231)

in-décor-able は「言語のなかに陰然と存在する *existe déjà en puissance dans la langue*」のだから、それが新形として現われることは、『資本論』で金や銀が「地中から出てくる *aus den Eingeweiden der Erde herauskommen*」と説かれることに通底する¹⁾。

そこで『講義』と『資本論』とのあいだに、通時論的事実：商品物神²⁾、共時論的事実：貨幣物神という対応が見通せる。つまり「進化の偶生的結果³⁾が共時論的事実において本質的な文法現象を組みたてずにはおかぬ *des résultats fortuits de l'évolution n'en constituent pas moins, dans l'ordre synchronique, des phénomènes grammaticaux essentiels*」というこのことを「共時論的事実は通時論的事実である」と表わせば、これは『資本論』の叙述「私は、本書のどこでも、ことを簡単にするために、金を貨幣商品として前提する」に通じるだろう⁴⁾。「金を貨幣商品として前提する」とは「貨幣商品は金である」にほかならないからである。そして

＜資＞ 困難は、貨幣が商品であることを理解する点にあるのではなく、どのようにして、なぜ、なにによって、商品が貨幣であるのかを理解する点にある。*Die Schwierigkeit liegt nicht darin zu begreifen, daß Geld Waare, sondern wie, warum, wodurch Waare Geld ist.* (p. 157)

と説かれるように、「貨幣商品は金商品である」は「どのようにして、なぜ、なにによって、商品は貨幣であるのか」を理解する上での契機である。

以上述べたことの論理を『大論理学』の「本質的相関は第一に現実存在の自己へと反省した自立態を含んでいる」が説く。「第一に」は第5文（『資本論』4パラグラフに対応）の「第二に」を予想する。すなわち前者は「本質的相関」の「一側面」たる「現実存在の自己へと反省した自立態」であり、これは「他の側面」たる「直接的な自立態」に対している。両者の関係について、直前する「現象」章の最後の叙述（「C 現象の解消」5パラグラフ）は次のように説いていた。

＜大＞ こうして法則は本質的相関である。非本質的世界の真理態ははじめにはこの世界に

とって他なる・それ自体で自立的に存在する世界である；だがこの世界〔それ自体で自立的に存在する世界〕は、それ自身でありかつあのはじめの世界〔非本質的世界〕であるからして、総体性である；こうして両者は直接的な現実存在であり、またそれとともにそれぞれの他在への反省であり、またまさにそれとともに真に自己へと反省した現実存在でもある。世界〔ということば〕は一般に多様態の没形式的な総体性を表現している；〔いまここで論じている〕本質的世界ならびに現象する世界としてのこの世界は、多様態がたんに差異された多様態であることをやめてしまったことによって、没落してしまって〔根拠へと到って〕いる diese Welt, sowohl als wesentliche wie als erscheinende, ist zugrunde gegangen, indem die Mannigfaltigkeit aufgehört hat, eine bloß verschiedene zu sein；こうしてこの世界はなお総体性ないしは万有ではあるが、しかし本質的相関としてのそれである。現象のうちに内容の二つの総体性が成立しているのである；はじめにはそれらは相互に対して無関心的な自立的なものとして規定されていて、たしかにそれぞれが形式を自分自身のもとにもってはいるが、しかし形式を相互に対してはもっていなかった；だがしかしこの形式は両者の関係でもあることが示されたのであり、こうして本質的相関が両者の形式統一 Formeinheit の完成なのである。⁵⁾

原文を付した箇所：「世界〔ということば〕は一般に多様態の没形式的な総体性を表現している」が、ただしいまここで論じている「本質的世界ならびに現象する世界としてのこの世界は、多様態がたんに差異された多様態であることをやめてしまったことによって、没落してしまって〔根拠へと到って〕いる」。これについては、具体的な例を言語事実に求めてみよう。或る脚本家が書いている。

1月のある夜、テレビでニュースを見ていると、スマートフォンについて街頭インタビューをしていた。すると、30代らしき男の人が、次のように答えた。

「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」
 どうです、この日本語。「行けられる」ですよ、「行けられる」。

また、昨年夏のこと。大きな試合に出場が決まったプロスポーツ選手が、テレビ番組で次のように話していた。

「自分が出れるとは思わなかった」

どうです、この日本語。「出れる」ですよ、「出れる」。

これらは「ら抜き」の言葉を認めた弊害である。彼らは「～することができる」という「可能」のニュアンスを伝えなかったのだと思う。「ら抜き」の場合、「出れる」で「可能」は示せたし、「行く」は「ら抜き」とは関係なく「行ける」で示せる。しかし、日常的に「ら抜き」で話している人にとって、そこに「can」のニュアンスはこもっていない気がしたのではないか。そして咄嗟に出たのが「行けられる」であり「出れる」だった。

だが、彼らを一方的に責めるわけにはいかない。責められるべきは「ら抜き」を許したことだ。常套思考の「言葉は生きもの。変化は当然」を猛省する必要がある。

先ごろある女性国会議員のインタビューをテレビで見たが、みごとに「ら抜き」で語る。もしかしたら「週末は地元に戻れた」とでも言うかと思ったが、さすがにそれはなかった。興味深かったのは、「ら抜き」で語る彼女の言葉に、画面表示ではすべて「ら」が加えら

れていたことだ。テレビ局の良心を見た気がした。(内館牧子「この途方もない言葉」日本経済新聞2011年2月19日)

画面表示の「ら」挿入にテレビ局の良心を見る脚本家は現代日本語なる特定共時態 *idiosynchronie* の話者である。その脚本家が「行けられる」を「途方もない言葉」と断ずるように、ここでも「行く：行けられる」の対立が「行く：行ける」に比べて「出色」ということはない。「行けられる」の類推的創造はあくまで進化の偶生的結果である。ただし「途方もない言葉」と呼びつつも、当の脚本家自身「スマートフォンは、レストランとか簡単に調べて行けられる」という30代男の発話を理解しており、つまりここでは言語交通がすでに成立している⁶⁾。すると「行けられる」と「行ける」とは、いまや「たんに差異された多様態であることをやめてしまったことによって、没落してしまって〔根拠へと到って〕いる」はずである。つまり「自立的に現実存在するものども（行けられる・行ける）がそれらの無関心態からそれらの（言語交通という）本質的統一へと還帰しており、その結果、それらはもっぱらこの統一だけを自分たちの存立としている」（『大論理学』p. 192）。すなわち「本質的相関」である。

なお『大論理学』第5文関連の「直接的自立態」は「自己における複多的な多様態 *eine vielfache Mannigfaltigkeit in sich*」であるのだから、対してここで説かれる「自己へと反省した自立態」は「単一（簡単）*einfach*」である（*vielfach* ↔ *einfach*）。だから『資本論』も「簡単化 *Vereinfachung*」して、「（銀・銅ならぬ）金を貨幣商品として前提する」のである。上述のようにこれは「貨幣商品は金である」・したがって「金である貨幣商品」なのだから、構文的に「現実存在である自己へと反省した自立態 *die in sich reflektierte Selbständigkeit der Existenz*」と同一である⁷⁾。

(2) ①金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、すなわち、諸商品価値を、質的に等しく量的に比較可能な同名の大きさとして表わすことにある。*Die erste Funktion des Goldes besteht darin, der Waarenwelt das Material ihres Werthausdrucks zu liefern oder die Waarenwerthe als gleichnamige Größen, qualitativ gleiche und quantitativ vergleichbare, darzustellen.* ②こうして金は、価値の一般的尺度として機能し、そしてもっぱらこの機能によってはじめて、独自の等価物商品である金がなによりもまず貨幣になる。*So funktioniert es als allgemeines Maß der Werthe und nur durch diese Funktion wird Gold, die spezifische Aequivalentwaare, zunächst Geld.* [①等は文の番号]

<大> A全体と諸部分との相関 1パラグラフ 第2文

②こうしてそれは単一な形式であり、この形式の〔両〕規定はたしかに現実存在でもあるが、しかし同時に定立された現実存在・統一のなかに含まれた契機である。*so ist es die einfache Form, deren Bestimmungen zwar auch Existenzen, aber zugleich gesetzte——Momente in der Einheit gehalten——sind.*

『資本論』第2文「こうして金は、価値の一般的尺度 *allgemeines Maß der Werthe* として機能する」とあるように、本パラグラフの論理は度量 *Maß* のそれにかかわる。すなわち「金」は「第一」

に「価値の一般的尺度として機能し」、次にその「金が貨幣になる」。「第一」に対する「第二」は明記されないが、かく把握されるべきである。ただしこのことは、『大論理学』『資本論』双方の邦訳書の対比からは分かりにくい。訳語にずれが存するからである。『資本論』で「一般的尺度」と訳される ‘allgemeines Maß’ に『大論理学』は「一般的度量」の訳語を当て、「一般的尺度」は ‘allgemeiner Maßstab’ の訳語である、という次第。ともあれ、『資本論』で「一般的尺度 allgemeines Maß」は本パラグラフ以降登場せず、そこに留意する必要がある。‘allgemeiner Maßstab’ (一般的尺度) については以文社版『大論理学』訳者(寺沢恒信)の注⁸⁾が参考になる。

それぞれの特殊な物は、それぞれの自然的度量(もしくは根源的な度量)をもっていると前提する(前提一)。それぞれの特殊な物はなにか或る一般的物体から成りたっており、この一般的物体はそれの度量(一般的度量)をもつと前提する(前提二)。この二つの前提がなりたつならば、特殊な物がもつ自然的度量は、一般的度量がある規則にしたがって特有化されたものであると認識することができ、基本的度量という性格をもつ一般的尺度が存在することになる。——しかしながら、ヘーゲルは、前提一が成りたつことを認めるが、前提二が成りたつとは認めない。したがって、基本的度量という性格をもつ一般的尺度などというものは無い、と主張しているのである。すなわち、一般的尺度は、外的比較に役立つ外的な尺度にすぎない、というのである。(第1巻 p. 432訳者注6)

つまり「一般的尺度 allgemeines Maß」としての「金」は度量論での低次の段階にあり、その「金が貨幣になる」ことでより高次へと論理は進展する⁹⁾。そして本第一節が「貨幣または商品流通 Das Geld oder die Waarencirkulation」章の「価値の尺度 Maß der Werthe」節である以上、「尺度 Maß」はすでに低次の Maß を脱している。

さて、『大論理学』で「それ」は「本質的相関」である。「本質的相関」は「自分自身の区別を自分のもとにもっており、そしてこの区別の〔両〕側面が自立的存立である」(『大論理学』p. 192)のだから、「それは単一な形式である」。そして「この形式の〔両〕規定」は上述の「両側面」・すなわち「自己へと反省した自立態(自己内反省した自立態) die in sich reflektierte Selbständigkeit」と「直接的な自立態 die unmittelbare Selbständigkeit」である。「現実存在」が「本質的相関」において「自分自身の区別を自分のもとにもっている」のだから、「両規定はたしかに現実存在である」。しかし両者は「同時に定立された現実存在・統一のなかに含まれた契機である」、というのには上にも引いたように、両者は「それらの無関心態からそれらの本質的統一へと還帰しており、その結果、それらはもっぱらこの統一だけを自分たちの存立としている」(同 p. 192)のだからである。

『資本論』第1文:「金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、すなわち、諸商品価値を、質的に等しく量的に比較可能な同名の大きさとして表わすことにある」。

『資本論』で「簡単な形態(単一な形式) einfache Form」は、「20エレのリンネル = 2オンスの金」のような「簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態 einfache, einzelne oder zufällige Werthform」である。そこでは「貨幣商品」である「金」が「商品世界にその価値表現の材料を提供し」¹⁰⁾、すなわち「諸商品価値を、質的に等しく量的に比較可能な同名の大きさとして表わす」¹¹⁾。換言すれば、「単一な形式」の「両規定(20エレのリンネル・2オンスの金)」は「たしかに現実存在でもある」——「現実存在(20エレのリンネル)の自己へと反省した自立態(2オンスの金)」

『資本論』第2文：「こうして金は、価値の一般的尺度として機能し、そしてもっぱらこの機能によってはじめて、独自の等価物商品である金がなによりもまず貨幣になる So funktioniert es als allgemeines Maß der Werthe und nur durch diese Funktion wird Gold, die spezifische Aequivalentwaare, zunächst Geld」。

「価値の一般的尺度 allgemeines Maß der Werthe」だが、例えば「フィート」で足の大きさを表わせばこれを「自然的な度量 ursprüngliches Maß」(岩波版上の二 p. 214) と言えようが、一般的に身長や水深を測るのに用いるならば「本源的 ursprünglich」とは言えず、それらの物にとって「フィート」は「外面的なもの etwas Äußerliches」(同)である。だから「これらの物(身長等)は一般的な比率的定量(特有の定量・30.48cm)を更にもう一度、比率的な(特殊な)仕方で比率化し(特有化し)、それによって比率的な(特殊な)物にせられている Diese haben das allgemeine spezifische Quantum wieder auf besondere Art spezifiziert und sind dadurch zu besonderen Dingen gemacht」(同 p. 215) のであり、「フィート」や「メートル」なども実は「このような一般的尺度 allgemeiner Maßstab を一般的度量 allgemeines Maß と取っている nehmen」(同)にすぎない——上に引いた以文社版訳者注を参照——。すなわちいわゆる一般的度量(『資本論』では「一般的尺度」)においては、「比率的定量(特有の定量) das spezifische Quantum」(量的なもの)とそれが「他のものに関係する」(同 p. 213) ところの「量的な比率化(量的な特有化する運動) ein quantitatives Spezifizieren」(質的なもの・すなわち無関心的な定量の揚棄)と、この「[両] 規定」が「定立された現実存在・統一のなかに含まれた契機である」。「金が、価値の一般的尺度 allgemeines Maß として機能する」のも別のことでなく、そして「もっぱらこの機能によってはじめて、独自の等価物商品である金がなによりもまず貨幣になる」。「金」が「独自の等価物商品 die spezifische Aequivalentwaare」であるのは、「商品世界の内部で一般的等価物の役割を演じることが、その商品種類の独自の社会的機能 ihre spezifisch gesellschaftliche Funktion となり、それゆえ、その社会的独占となる」(p. 119)、その商品がまさに「金」だからである。

(3) ①諸商品は、貨幣によって同単位での計量が可能となるのではない。Die Waaren werden nicht durch das Geld kommensurabel. ②逆である。Umgekehrt. ③すべての商品が価値としては対象化された人間的労働であり、それゆえそれ自体が同単位で計量可能であるからこそ、すべての商品はその価値を同じ独自の商品で共同ではかり、そうすることによって、この独自の商品に諸商品の共同の価値尺度または貨幣に転化することができるのである。Weil alle Waaren als Werthe vergewegenständlichte menschliche Arbeit, daher an und für sich kommensurabel sind, können sie ihre Werthe gemeinschaftlich in derselben spezifischen Waare messen und diese dadurch in ihr gemeinschaftliches Werthmaß oder Geld verwandeln. ④価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的価値尺度である労働時間の必然的現象形態である。Geld als Werthmaß ist notwendige Erscheinungsform des immanenten Werthmaßes der Waaren, der Arbeitszeit.

<大> A全体と諸部分との相関 1 パラグラフ 第3文

③この自己へと反省した自立態は同時に自分の反対のもの・すなわち直接的な自立態への反省で

ある Diese in sich reflektierte Selbständigkeit ist zugleich Reflexion in ihr Entgegengesetztes, nämlich die *unmittelbare* Selbständigkeit ;

『大論理学』で「この自己へと反省した自立態」とは「本質的相関」が含んでいるところの「現実存在の自己へと反省した自立態 die in sich reflektierte Selbständigkeit der Existenz」であり、つまり「現実存在」の「自己内反省 Reflexion-in-sich」であるのだから、「同時に自分の反対のもの・すなわち直接的な自立態への反省である」。

『資本論』第1文・第2文：「諸商品は、貨幣によって同単位での計量が可能となるのではない。逆である。」第1文が直接には前章最終パラグラフに説かれた「虚偽の外観 falscher Schein」を承けていることは上にも触れた。ともあれ「諸商品は、貨幣によって同単位での計量が可能となるのではない」と謂うのだから、この叙述は——原書の語順に従って——「同時に反省である ist zugleich Reflexion」。それゆえ第2文「逆である」。

そこで第3文が「自分（第1文）の反対のもの」を説く。

『資本論』第4文：「価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的価値尺度である労働時間の必然的現象形態である Geld als Werthmaß ist nothwendige Erscheinungsform des immanenten Werthmaßes der Waaren, der Arbeitszeit」。

「現象」について『大論理学』「現象」章の冒頭は次を説く。

＜大＞ 現実存在は本質がそれへと自己を回復した存在の直接態である。この直接態は本来的に本質の自己への反省である。本質は現実存在として自分の根拠から歩み上ったのであり、根拠はそれ自身が現実存在へと移行してしまっている。現実存在は、それ自身のもとの絶対的否定態であるその限りで、この反省した直接態である。現実存在は、現象として規定されたことによって、いまやこのもの「反省した直接態」として定立されてもいるのである。(p. 174)

言語事実に例を採ろう。「行けられる」が30代男の発話として「現象」するのは、これを脚本家が「途方もない言葉」と呼びつつも理解するように、「この直接態が本来的に本質の自己への反省である diese Unmittelbarkeit ist an sich die Reflexion des Wesens in sich」からである。そして「本質の自己への反省である直接態」は「本質がそれへと自己を回復した存在の直接態 die Unmittelbarkeit des Seins, zu der sich das Wesen wiederhergestellt hat」であるのだから、「同時に自分の反対のもの・すなわち直接的な自立態への反省である」ところの「自己へと反省した自立態」とは「本質」にはかならない。つまりいま「本質」は「現象」たる「行けられる」として「定立されてもいる」。同様に、「諸商品の内在的価値尺度」・「労働時間」は「本質」であるから、それはいま「自己へと反省した自立態」として「同時に……直接的な自立態——「現象形態」たる「価値尺度としての貨幣」——への反省である」。

(4) ①金による一商品の価値表現——x 量の商品 A=y 量の貨幣商品——は、その商品の貨幣形態またはその商品の価格である。Der Werthausdruck einer Waare in Gold — x Waare A = y Geldwaare — ist ihre Geldform oder ihr Preis. ②鉄の価値を社会的に通用する仕方では表わすために

は、1 トンの鉄 = 2 オンスの金 というような単一の式でいまや十分である。Eine vereinzelt Gleichung, wie 1 Tonne Eisen = 2 Unzen Gold, genügt jetzt um den Eisenwerth gesellschaftlich gültig darzustellen。③この等式は、他の諸商品の価値等式と隊伍を整えて行進する必要はもはやない。なぜなら、等価物商品である金がすでに貨幣の性格を帯びているからである。Die Gleichung braucht nicht länger in Reih und Glied mit den Werthgleichungen der andren Waaren aufzumarschiren, weil die Aequivalentwaare, das Gold, bereits den Charakter von Geld besitzt。[原書は一文] ④それゆえ、諸商品の一般的な相対的価値形態は、いまやふたたび、その最初の、簡単なまたは個別的な相対的価値形態の姿態をとる。Die allgemeine relative Werthform der Waaren hat daher jetzt wieder die Gestalt ihrer ursprünglichen, einfachen oder einzelnen relativen Werthform。⑤他面、展開された相対的価値表現、または相対的価値諸表現の無限の列が、貨幣商品の独自の相対的価値形態になる。Anderseits wird der entfaltete relative Werthausdruck oder die endlose Reihe relativer Werthausdrücke zur specifisch relativen Werthform der Geldwaare。⑥しかし、この列は、いまやすでに諸商品価格のうちに社会的に与えられている。Diese Reihe ist aber jetzt schon gesellschaftlich gegeben in den Waarenpreisen。⑦物価表の値段表示をうしろから読めば、貨幣の価値の大きさがありとあらゆる商品で表わされていることがわかる。Man lese die Quotationen eines Preiskurants rückwärts und man findet die Werthgröße des Geldes in allen möglichen Waaren dargestellt。⑧これに反して、貨幣はなんの価格ももたない。Geld hat dagegen keinen Preis。⑨他の諸商品のこうした統一的な相対的価値形態に参加するためには、貨幣はそれ自身の等価物としてのそれ自身に関連させられなければならないであろう。Um an dieser einheitlichen relativen Werthform der andren Waaren theilzunehmen, müßte es auf sich selbst als sein eignes Aequivalent bezogen werden。

<大> A 全体と諸部分との相関 1 パラグラフ 第4文～第9文

④自己へと反省した自立態の存立は本質的に、自分自身の自立態であるとともに、また同じく自分の反対のものとこの同一性である。und ihr Bestehen ist wesentlich ebenso sehr, als es eigene Selbständigkeit ist, diese Identität mit seinem Entgegengesetzten。——⑤まさにこれとともに第二に他の側面もまた直接に定立されている Eben damit ist auch unmittelbar zweitens die andere Seite gesetzt; ⑥[それは]直接的な自立態[であるが、この自立態]は、他者として規定されており、自己における複多的な多様態である、だがしかしこの多様態が本質的に他の側面の関係・反省した自立態の統一をもまた自分のもとにもっている、というぐあいである。die unmittelbare Selbständigkeit, welche, als das Andere bestimmt, eine vielfache Mannigfaltigkeit in sich ist, aber so, daß diese Mannigfaltigkeit wesentlich auch die Beziehung der anderen Seite, die Einheit der reflektierten Selbständigkeit an ihr hat。⑦さきの側面・すなわち全体は完全に自立的に存在する世界をなしていた自立態である Jene Seite, das Ganze, ist die Selbständigkeit, welche die an und für sich seiende Welt ausmachte; ⑧もうひとつの側面・すなわち諸部分は現象する世界であった直接的な現実存在である。die andere Seite, die Teile, ist die unmittelbare Existenz, welche die erscheinende Welt war。⑨全体と諸部分との相関においては両側面がこれらの自立態である、だがしかしそれぞれの側面が他の側面を自分のなかに映現させ、こうしてもっぱら同時に両側面のこの同一性としてある、というぐあいである。Im Verhältnisse des Ganzen und der Teile sind die beiden Seiten diese Selbständigkeiten, aber so, daß jede die andere in ihr scheinen hat und nur ist zugleich als

diese Identität beider.

複雑な論理が展開されるゆえ、あらかじめ見通しをつけておこう。『大論理学』では「全体」と「諸部分」への言及がなされ、対応して『資本論』では「金による一商品の価値表現—— x 量の商品 $A=y$ 量の商品 B 」において「金がすでに貨幣の性格を帯びている」こと、したがって「諸商品の一般的な相対的価値形態が簡単なまたは個別的な相対的価値形態の姿態をとる」ことが説かれる。つまりここでも「諸部分」において「全体」が把握されるのである。両テキストの直接的な対応関係に従って読み解いてゆく。

『大論理学』第4文「自己へと反省した自立態の存立は本質的に、自分自身の自立態であるとともに、また同じく自分の反対のものとこの同一性である」：『資本論』第1文「金による一商品の価値表現—— x 量の商品 $A=y$ 量の貨幣商品——は、その商品の貨幣形態またはその商品の価格である」。

『大論理学』で「自己へと反省した自立態」を「本質」と解すれば、この叙述の理解は容易である。「存在の真理態は本質である」(p. 15) のだからである。そして「度量の中には、すでに本質の観念が含まれている」(岩波版上の二 p. 207) ことに鑑み、「フィート」を例として挙げよう。まず度量篇「比率的量（特有の量）die spezifische Quantität」章「B 比率化的度量（特有化する度量）spezifizierendes Maß」の「a 規則 Die Regel」を参照する（岩波版からの引用だが、原書における文の区切りを明示すべく、原語も挙げておく）。

<大> 規則または上に述べた尺度は、それ自身における特定の大きさ [即自的に規定された大きさ] としてある。この特定の大きさは定量に対する単位である。定量は比率的な実存 [各特性をもつ実存] で、規則である或るものとは別の或るものの中に実存するものであり、——規則によって計量される。云いかえると、定量は単位の集合数という規定をもつ。Das Regel oder Maßstab, von dem schon gesprochen werden, ist zunächst als eine an sich bestimmte Größe, welche Einheit gegen ein Quantum ist, das eine besondere Existenz ist, an einem anderen Etwas, als das Etwas der Regel ist, existiert, an ihr gemessen, d.i. als Anzahl jener Einheit bestimmt wird. この比較は外面的な行為である。前の単位の方は任意の大きさである。だから、この大きさは同様にまた集合数とせられることもできる。Diese Vergleichung ist ein äußerliches Tun, jene Einheit selbst eine willkürliche Größe, die ebenso wieder als Anzahl (der Fuß als eine Anzahl von Zollen) gesetzt werden kann. しかし、度量は単に外面的規則ではなくて、むしろ比率的度量として、定量であるところの自分の他者にそれ自身において [本来的に] 関係するものである。Aber das Maß ist nicht nur äußerliche Regel, sondern als spezifisches ist es dies, sich an sich selbst zu seinem Anderen zu verhalten, das ein Quantum ist.

また以文社版訳者の与える注は「規則」を理解する上で有効である。

度量の概念が実在化されるためには、度量は「特有の定量 das spezifische Quantum」においてよりまなおいっそう質的であらねばならない。そしてそのためには「特有の定量」であることをやめなければならない。そこで現われるのが「規則」である。規則は……（中略）……

「それ自身が定量ではなく、量的な特有化する運動 *ein quantitatives Spezifizieren* であり、無関心的な定量を揚棄する運動である。」——ここでおこなわれる展開が、特有化されているにもせよとにかく「定量」である「特有の定量」から、「それ自身が定量でない」「規則」への進展であることにとくに留意してほしい。(第1巻 p. 432訳者注8)

例えば「フィート」をもって「足の大きさ」だと言っても、実際にはそれは人によって異なる。つまり度量としての「フィート」はあくまで「特有の定量」である。「特有の定量」だからこそ、「量的な特有化する運動」において、「定量」(例えば身長)に対する「単位」でありうる。逆には「定量は単位の集合数という規定をもつ」。そこで「自己へと反省した自立態(フィート)の存立は本質的に、自分自身の自立態(単位)であるとともに、また同じく自分の反対のもの(定量)とのこの同一性である」と謂われる。『資本論』で「金による一商品の価値表現—— x 量の商品 $A = y$ 量の貨幣商品」はこの「同一性」であり、すなわち「単位」たる「貨幣商品」の「分量」(集合数)が「商品の貨幣形態または商品の価格」である。

『大論理学』第5文「まさにこれとともに第二に他の側面もまた直接に定立されている」：『資本論』第2文「鉄の価値を社会的に通用する仕方では、1 トンの鉄 = 2 オンスの金」というような単一の式でいまや十分である」。

『大論理学』で「これ(とともに)」は、「自己へと反省した自立態の存立は本質的に、自分自身の自立態であるとともに、また同じく自分の反対のものとのこの同一性である」ことを指す。すると「まさにこれとともに第二に他の側面もまた直接に定立されている」というのは「第二に他の側面」とは上述「第一」で説かれた「自己へと反省した自立態」の「反対のもの」だが、或るものが「自分の反対のものとの同一性である」以上その「反対のもの」・すなわち「他の側面もまた直接に定立されている」からである。そして「第一の側面」のみならず「第二の側面もまた直接に定立されている」ので、『資本論』は「単一の式でいまや十分である」と謂う。

『大論理学』第6文「[それは] 直接的な自立態 [であるが、この自立態] は、他者として規定されており、自己における複多的な多様態である、だがしかしこの多様態が本質的に他の側面の関係・反省した自立態の統一をもまた自分のもとにもっている、というぐあいにである」：『資本論』第3文・第4文「この等式は、他の諸商品の価値等式と隊伍を整えて行進する必要はもはやない。なぜなら、等価物商品である金がすでに貨幣の性格を帯びているからである。[以上原書で一文] それゆえ、諸商品の一般的な相対的価値形態は、いまやふたたび、その最初の、簡単なまたは個別的な相対的価値形態の姿態をとる。」

第6文の前半「直接的な自立態は、他者として規定されており、自己における複多的な多様態である」は「一般的価値形態 *allgemeine Werthform*」すなわち

1 着の上着	=	} 20エレのリンネル
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1 クォーターの小麦	=	
2 オンスの金	=	
1/2 トンの鉄	=	
x 量の商品 A	=	
等々の商品	=	

を念頭に理解されよう。ここで「等価物商品」たる「20エレのリンネル」は「一般的等価物 *allgemeines Aequivalent*」として「自己へと反省した自立態」であり——価値関係「1 着の上着 = 20エレのリンネル」において「一商品（上着）の価値が他の商品（リンネル）の使用価値で表現される」（p. 89）——、『資本論』第3文に謂うように「すでに貨幣の性格を帯びている」。すなわちこの形態が「商品世界に一般的社会的な相対的価値形態を与える」（p. 116）のであって、「1 着の上着」「10ポンドの茶」等の「直接的な自立態は、（20エレのリンネルの）他者として規定されており、自己における複多的な多様態 *eine vielfache Mannigfaltigkeit in sich* である」。そうであれば「他の諸商品の価値等式と隊伍を整えて行進する必要はもはやない」。そして「リンネルの代わりに金が一般的等価形態をとる」（p. 119）のが「貨幣形態 *Geldform*」であった。

20エレのリンネル	=	} 2 オンスの金
1 着の上着	=	
10ポンドの茶	=	
40ポンドのコーヒー	=	
1 クォーターの小麦	=	
1/2 トンの鉄	=	
x 量の商品 A	=	

次に第6文後半「だがしかしこの多様態が本質的に他の側面の関係・反省した自立態の統一をもまた自分のもとにもっている、というぐあいである」は、「a 規則」に続く「b 比率化的度量（特有化する度量）」の参照が論理の把握に役立つ。

<大> 度量は外面的な大きさ、即ち無関心的な大きさの比率的な規定をなすものである。そこで外面的、無関心的な大きさは度量としての或るものの中に措定されて、一般に他の実存に適用されることになる。もちろん、この度量もそれ自身は定量ではあるが、しかし定量とは区別されて、単に無関心的で外面的な定量を規定するところの質的なものである。Das Maß ist spezifisches Bestimmen der äußerlichen Größe, d.i. der gleichgültigen, die nun von einer anderen Existenz überhaupt an dem Etwas des Maßes gesetzt wird, welches zwar selbst Quantum, aber im Unterschiede von solchem das Qualitative, bestimmend das bloß gleichgültige, äußerliche Quantum, ist. 或るものは、その中にこのような向他有の面をもつもので、無関心

的な増減は、この面に出て来る。Das Etwas hat diese Seite des Seins-für-Anderes an ihm, der das gleichgültige Vermehrt- und Vernindertwerden zukommt. 前の内在的計量者は或るものの質であって、この或るものには他の或るものの中にある同一の質が対立している。しかし他の或るものの中にあるこの質は、計量するものと規定されている前者の質に比べると、差し当っては〔それ自身としては〕一般に没度量的な定量である。Jenes immanente Messende ist eine Qualität des Etwas, dem dieselbe Qualität an einem anderen Etwas gegenübersteht, aber an diesem zunächst relativ mit maßlosem Quantum überhaupt gegen jene, die als messend bestimmt ist. / 或るものが、それ自身において度量であるかぎり、その質の大きさの変化は、或るものには外面的に起る An Etwas, insofern es ein Maß in sich ist, kommt äußerlich eine Veränderung der Größe seiner Qualität; 或るものは、その変化について算術的数量を受けつけない。es nimmt davon nicht die arithmetische Menge an. だが、この或るものの度量も、この変化に対して反応を示し、内包的なものとして、この変化に関することになり、固有の仕方て数量を受け入れる Sein Maß reagiert dagegen, verhält sich als ein Intensives gegen die Menge und nimmt sie auf eine eigentümliche Weise auf; 即ち、この度量は外面的に措定された変化を変じ、この定量を他のものに変え、この比率化によって自身この外面性の中で向自有として立ち現われる。es verändert die äußerlich gesetzte Veränderung, macht aus diesem Quantum ein Anderes und zeigt sich durch diese Spezifikation als Fürsichsein in dieser Äußerlichkeit.¹²⁾

そして具体例を伴う以文社版訳者の注は有益である（ただしこの訳者注は直接には初版に対するものである）。

（「B 比率化的度量（特有化する度量）」節のもっとも適切な具体例は）「比熱」（ないしは、熱容量）である。現代の物理学では、1 グラムの純粋な水の温度を、14.5℃から15.5℃にあげるのに必要な熱量を「1 カロリー」と定義している。いましばらく、諸物体に外からの熱を与えるにあたって、どのような方法で熱が与えられるかということ度を外視する。さて、1 グラムの金・銀・銅・鉄の温度を20℃から21℃へとあげるには、それぞれ0.0309cal, 0.0560 cal, 0.0919cal, 0.1070cal の熱量が必要である。外から与えられる熱は定量として、ここでのヘーゲルの表現にしたがえば「算術的な集合」として存在している。だが前述のように、それぞれの元素は「この集合をそれに固有の仕方て取りあげる」のである。あたかも、1 グラムの金は0.0309cal 入りの・1 グラムの銀は0.0560cal 入りの……「ます」を自己の内部にかくしもっていて、それぞれ大きさのちがった自己の「ます」が一杯になったときに温度を一度上昇させる、かのようにみえる。「熱容量」ということばはこのような比喩的な考え方による名称であろう。熱容量の大小とは、いわば、この「ます」の大小だといえる。そしてこの大小は、それぞれの元素または化合物に特有の定量である。それぞれの元素や化合物の質に直接に結びついた定量である。だが、比重の場合には、物体の質に直接に結びついている定量が重さであったが、熱容量の場合には、この定量が熱であるのではない。先の比喩的な言い方を用いれば、この定量とは、外から与えられる熱量を計って受け入れる「ます」の大きさなのであり、より正確にいえば、外から与えられる熱に対する反作用の仕方であり、定量（熱）を「規定するものとしての質的なもの」である。——すなわちこの実例の場合には、金・銀・銅・鉄などが外

から与えられる熱に反作用するそれぞれに特有の仕方をもっており、この特有の仕方がそれぞれの「質的なもの」をなしている。他方、外から与えられる熱量は定量として存在している。こうして「規則」の両契機は、まず区別されている。そしてその上で、外から与えられる熱によって、金・銀・銅・鉄などはそれぞれちがった仕方で自己の温度を変化させる。この温度の変化のなかで両契機は統一される。……（中略）……「反省された統一」であるといわれるゆえんがここにある。（p. 433訳者注11）

「外から与えられる熱」が「算術的な集合」であるように、「金」も定量として存在する。他方諸商品はいわば「金容量」である「ます」（内在的計量者）をもち、これは「単に無関心的で外面的な定量を規定するところの質的なものである」。すなわち「2オンスの金」を「1エレのリンネル」の「ます」は20杯で満たし、「1着の上着」の「ます」は1杯で・「1ポンドの茶」の「ます」は10杯で満たす等々、「或るもの（諸商品）」は、その中にこのような向他有の面をもつもので、無関心的な増減は、この面に出て来る——「無関心的な増減」ゆえに、商品によって「ます」の数量が違って来る——。そして「内在的計量者（ます）は或るもの（諸商品）の質であって、この或るものには他の或るもの（金）の中にある同一の質（ます）が対立している」。つまり「多様態が自分のもとにもっている」ところの「反省した自立態の統一」とはこの「ます」であり、「多様態が本質的に反省した自立態の統一をもまた自分のもとにもっている」ゆえに、『資本論』第4文「それゆえ、諸商品の一般的な相対的価値形態は、いまやふたたび、その最初の、簡単なまたは個別的な相対的価値形態の姿態をとる」と説かれる。ここでも「最初の、簡単なまたは個別的な相対的価値形態の姿態」が「一般的な相対的価値形態の姿態」をもまた自分のもとにもっているからである。

『大論理学』第7文「さきの側面・すなわち全体は完全に自立的に存在する世界をなしていた自立態である Jene Seite, das Ganze, ist die Selbständigkeit, welche die an und für sich seiende Welt ausmachte」:『資本論』第5文・第6文「他面、展開された相対的価値表現、または相対的価値諸表現の無限の列が、貨幣商品の独自の相対的価値形態になる。Anderseits wird der entfaltete relative Werthausdruck oder die endlose Reihe relativer Werthausdrücke zur spezifisch relativen Werthform der Geldwaare. しかし、この列は、いまやすでに諸商品価格のうちに社会的に与えられている。Diese Reihe ist aber jetzt schon gesellschaftlich gegeben in den Waarenpreisen.」

この対応は原書の語順に注目して把握が容易になる。『大論理学』の「さきの側面」は「自己へと反省した自立態」であり、それは「自分自身の自立態であるとともに、また同じく自分の反対のものとのこの同一性である」ことにおいて本質的に存立する、ゆえに「全体」である。対応して『資本論』は「他面（の）、展開された相対的価値表現、または相対的価値諸表現の無限の列」に言及する。この「相対的価値諸表現の無限の列」をもつ「展開された相対的価値形態」は「簡単なまたは個別的な相対的価値形態」に対しては「全体」だからである。次に『大論理学』は——原書の語順で——その「全体は自立態である」と説くが、『資本論』に謂う「貨幣商品の相対的価値形態」はその「独自 spezifisch」であることにおいて「自立態」である。つまり「貨幣商品」は、度量論で「外面的な大きさ、即ち無関心的な大きさの比率的な規定をなす spezifisches Bestimmen」ところの「度量」であり、その「自立態」（貨幣商品の独自の相対的価値形態）は「完全に自立的に存在する世界 die an und für sich seiende Welt」として「いまやすでに諸商品価格のうちに社会的に与えられている」。

『大論理学』第8文「もうひとつの側面・すなわち諸部分は現象する世界であつた直接的な現実存在である」：『資本論』第7文「物価表の値段表示をうしろから読めば、貨幣の価値の大きさがあつたとあらゆる商品で表わされていることがわかる Man lese die Quotationen eines Preiskurants rückwärts und man findet die Werthgröße des Geldes in allen möglichen Waaren dargestellt」。

『大論理学』は「全体」に対する「諸部分」に言及し、応じて『資本論』は「物価表の値段表示をうしろから読む」。そして「全体」と「諸部分」との相関仕方は「前の内在的計量者（全体）は或るものの質であつて、この或るものには他の或るもの（諸部分）の中にある同一の質が対立している」、というものである。すなわち「対立している gegenübersteht」がゆえに「物価表の値段表示をうしろから rückwärts 読む」であり、「全体」に対する「諸部分」なので「貨幣の価値の大きさがあつたとあらゆる商品で in allen möglichen Waaren 表わされている」のであつた¹³⁾。

『大論理学』第9文「全体と諸部分との相関においては両側面がこれらの自立態である、だがしかしそれぞれの側面が他の側面を自分のなかに映現させ、こうしてもつぱら同時に両側面のこの同一性としてある、というぐあいにである」：『資本論』第8文・第9文「これに反して、貨幣はなんの価格もたない。他の諸商品のこうした統一的な相対的価値形態に参加するためには、貨幣はそれ自身の等価物としてのそれ自身に関連させられなければならないであろう。」

『大論理学』で「これらの自立態」とは「完全に自立的に存在する世界」（全体）と「現象する世界」（諸部分）とである。この「両側面」が「同一性としてある」のは「或るもの（全体）には他の或るもの（諸部分）の中にある同一の質が対立している」からである。ただしその「同一性」においても、「他の或るものの中にあるこの質は、計量するものと規定されている前者の質に比べると、差し当つては〔それ自身としては〕一般に没度量的な定量である」と説かれるように、重点は「計量するもの（全体）と規定されている前者の質」にある¹⁴⁾。つまり仮に「貨幣が価格をもつ」とすれば、それは「没度量的な定量 maßloses Quantum」¹⁵⁾としてであり、だから「他の諸商品のこうした統一的な相対的価値形態に参加するために、貨幣がそれ自身の等価物としてのそれ自身に関連させられなければならない」と謂われる。それは無論不可能なのだが。

(5) ①商品の価格または貨幣形態は、商品の価値形態一般と同じように、手をつかめるその実在的な物体形態から区別された、したがって単に観念的な、または表象されただけの形態である。Der Preis oder die Geldform der Waaren ist, wie ihre Werthform überhaupt, eine von ihrer handgreiflich reellen Körperform unterschiedne, also nur ideelle oder vorgestellte Form. ②鉄、リンネル、小麦などの価値は、目には見えないけれども、これらの物そのもののうちに実存する Der Werth von Eisen, Leinwand, Weizen u.s.w. existirt, obgleich unsichtbar, in diesen Dingen selbst; ③これらの価値は、それらの物の金との同等性によって、それらの物のいわば頭のなかにだけ現われる金との関連によって、表象される。er wird vorgestellt durch ihre Gleichheit mit Gold, eine Beziehung zum Gold, die so zu sagen nur in ihren Köpfen spukt. ④だから、商品の保護者は、商品の価格を外界に伝えるためには、自分の舌で商品の代弁をするか、または商品に紙札をさげなければならぬ。Der Waarenhüter muß daher seine Zunge in ihren Kopf stecken oder ihnen Papierzettel umhängen, um ihre Preise der Außenwelt mitzutheilen. ⑤金による商品価値の表現は観念的なものであるから、この操作のためには、やはりただ表象されただけの、または観念的な金が使われる。

Da der Ausdruck der Waarenwerthe in Gold ideell ist, ist zu dieser Operation auch nur vorgestelltes oder ideelles Gold anwendbar. ⑥商品の保護者のだれもが知っているように、彼が自分の商品の価値に価格の形態または表象された金形態を与えても、彼はとうていまだその商品を金に化したわけではなく、また、幾百万の商品価値を金で評価するためにも、現実の金の一片も彼には必要ではない。Jeder Waarenhüter weiß, daß er seine Waaren noch lange nicht vergoldet, wenn er ihrem Werth die Form des Preises oder vorgestellte Goldform giebt, und daß er kein Quentchen wirkliches Gold braucht um Millionen Waarenwerthe in Gold zu schätzen. ⑦だから、価値尺度という機能においては、貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つのである。In seiner Funktion des Werthmaßes dient das Geld daher — als nur vorgestelltes oder ideelles Geld. ⑧この事情は、きわめてばかげた諸理論を生み出した。Dieser Umstand hat die tollsten Theorien veranlaßt. ⑨価値尺度機能のためには、ただ表象されただけの貨幣が役立つとはいえ、価格はまったく実在的な貨幣材料に依存している。Obgleich nur vorgestelltes Geld zur Funktion des Werthmaßes dient, hängt der Preis ganz von reellen Geldmaterial ab. ⑩たとえば、一トンの鉄に含まれる価値、すなわち人間的労働の一定分量が、等しい量の労働を含む貨幣商品の表象された一定分量によって表現される。Der Werth, d.h. das Quantum menschlicher Arbeit, das z.B. in einer Tonne Eisen enthalten ist, wird ausgedrückt in einem vorgestellten Quantum der Geldwaare, welches gleichviel Arbeit enthält. ⑪したがって、金、銀、銅のどれが価値尺度として使われるかに従って、同じトンの鉄の価値はまったく異なる価格表現を受け取るものであり、言い換えれば、金、銀、銅のまったく異なる量によって表象されるのである。Ja nachdem also Gold, Silber oder Kupfer zum Werthmaß dienen, erhält der Werth der Tonne Eisen ganz verschiedene Preisausdrücke, oder wird in ganz verschiedenen Quantitäten Gold, Silber oder Kupfer vorgestellt.

<大> A 全体と諸部分との相関 1 パラグラフ 第10文～第15文

⑩さて本質的相関はやっと最初の・直接的な相関にすぎないので、否定的統一と肯定的自立態とはもまたによって結びつけられている Weil nun das wesentliche Verhältnis nur erst das erste, unmittelbare ist, so ist die negative Einheit und die positive Selbständigkeit durch das Auch verbunden; ⑪両側面はたしかに契機として定立されているが、しかしまた同じく [二つの] 現実存在する自立態としてある。beide Seiten sind zwar als Momente gesetzt, aber ebenso sehr als existierende Selbständigkeiten. — ⑫両者が契機として定立されているということは、それだからつぎのようにふり分けられている。すなわち第一に、全体・反省した自立態が現実存在するものとしてあり、そしてこの自立態においては他方の・直接的な自立態は契機としてある。Daß beide als Momente gesetzt sind, dies ist daher so verteilt, daß erstens das Ganze, die reflektierte Selbständigkeit, als Existierendes und in ihr die andere, die unmittelbare, als Moment ist; [原書は一文] — ⑬ここでは全体が両側面の統一・すなわち基礎をつくりなしており、直接的な現実存在は定立された存在としてある。hier macht das Ganze die Einheit beider Seiten, die Grundlage aus, und die unmittelbare Existenz ist als Gesetzsein. — ⑭逆に他方の側面・すなわち諸部分の側面では、直接的な・自己において多様な現実存在が自立的な基礎であり、⑮これに反して反省した統一・全体は外的関係にすぎないのである。Umgekehrt ist auf der andern Seite, nämlich der Seite der Teile, die unmittelbare, in sich mannigfaltige Existenz die selbständige Grundlage; die reflektierte Einheit dagegen, das

Ganze, ist nur äußerliche Beziehung. [原書は二文]

本パラグラフの読解も両テキストの直接的対応に従って進めるが、それに先立ってはやはり度量論を参照しておこう。上に引いた「b 比率化的度量」の叙述に続く箇所であるが、初版の叙述の方が分かりやすい¹⁶⁾。

＜大＞ [度量の] このふるまいのなかで二つの定量が成立する Es entstehen in diesem Verhalten zwei Quanta; 一方は外的集合であり、他方は特有的に取りあげられた集合である。das eine ist äußerliche Menge, das andere die spezifisch-aufgenommene. — 後者はそれ自身が一つの定量であり、前者に依存している。Die letztere ist selbst ein Quantum und abhängig von der ersteren. だからそれは可変的でもある。Sie ist daher auch veränderlich; だがそれはだからといって定量そのものではなく、恒常的な仕方と特有化されたものとしての外的定量である。aber es ist darum nicht ein Quantum als solches, sondern das äußere Quantum als auf eine konstante Weise spezifiziert. したがって度量は比としてその定在をもっており、この比の特有なものは一般にこの比の指数である。Das Maß hat also sein Dasein als Verhältnis, und das Spezifische desselben ist überhaupt der Exponent dieses Verhältnisses.

『大論理学』第10文「さて本質的相関はやっと最初の・直接的な相関にすぎないので、否定的統一と肯定的自立態とはもまたによって結びつけられている」:『資本論』第1文・第2文「商品の価格または貨幣形態は、商品の価値形態一般と同じように、手をつかめるその実在的な物体形態から区別された、したがって単に観念的な、または表象されただけの形態である。鉄、リンネル、小麦などの価値は、目には見えないけれども、これらの物そのもののうちに実存する。」

『大論理学』が「本質的相関はやっと最初の・直接的な相関にすぎない」と説くのは、「絶対的相関 absolutes Verhältnis」においては「[両] 契機の存立することがただ一つの存立である」(p. 254) ことを見通してのことである¹⁷⁾。つまり「本質的相関」の両契機はともに自立的なものとして区別され、先に述べたことにかかわって言えば、両契機の同一性がまだ定立されていないのである。だから『資本論』もまた「商品の価格または貨幣形態」と「その(商品の)物体形態」との「区別」に言及し、すなわち「手をつかめて実的な handgreiflich reelle」後者に対する「単に観念的な、または表象されただけ nur ideell oder vorgestellt」の前者である。

『大論理学』で続く「否定的統一と肯定的自立態」とは、上に説かれた「全体と諸部分との相関においては両側面がこれらの自立態である、だがしかしそれぞれの側面が他の側面を自分のなかに映現させ、こうしてもっぱら同時に両側面のこの同一性としてある、というぐあいにである」を承ける。その「否定的統一と肯定的自立態とがもまたによって結びつけられている durch das Auch verbunden」ということに対応して『資本論』第2文である。つまり「目には見えない unsichtbar 価値」(否定的統一)が「物そのもののうちに実存する」(肯定的自立態)のは、「否定的統一と肯定的自立態とがもまたによって結びつけられている」からである。

なお先を見通しておくならば、「否定的統一と肯定的自立態」は「価値の尺度 Maß der Werthe」と「価格の度量基準 Maßstab der Preise」という「貨幣」の「二つのまったく異なる機能」(p. 166)として捉え返されるであろう。

『大論理学』第11文「両側面はたしかに契機として定立されているが、しかしまた同じく〔二つの〕現実存在する自立態としてある」：『資本論』第3文「これらの価値は、それらの物の金との同等性によって、それらの物のいわば頭のなかにだけ現われる金との関連によって、表象される」。

『大論理学』が「〔両〕契機」の「また同じく〔二つの〕現実存在する自立態としてある」と説くのに対応して、『資本論』も「〔両〕契機として定立されている」ところの「価値」とその「(物における)実存」とが「また同じく〔二つの〕現実存在する自立態としてある」ことを説く。「物のうちに実存する価値」が「現実存在する自立態としてある」ことはよからう。他方その実存する「価値は、それらの物の金との同等性によって、それらの物の金との関連によって、表象される *er wird vorgestellt durch ihre Gleichheit mit Gold, eine Beziehung zum Gold*」が、その「金」は「いわば頭のなかにだけ現われる *so zu sagen nur in ihren Köpfen spukt*」のだから——*spuken*：幽霊・亡霊が出る——、それと関連する「価値」もまたその「(物における)実存」とは区別される「現実存在する自立態」である。

『大論理学』第12文「——両者が契機として定立されているということは、それだからつぎのようにふり分けられている。すなわち第一に、全体・反省した自立態が現実存在するものとしてあり、そしてこの自立態においては他方の・直接的な自立態は契機としてある *Daß beide als Momente gesetzt sind, dies ist daher so verteilt, daß erstens das Ganze, die reflektierte Selbständigkeit, als Existierendes und in ihr die andere, die unmittelbare, als Moment ist*」：『資本論』第4文・第5文「だから、商品の保護者は、商品の価格を外界に伝えるためには、自分の舌で商品の代弁をするか、または商品に紙札をさげるかしなければならない。金による商品価値の表現は観念的なものであるから、この操作のためには、やはりただ表象されただけの、または観念的な金が使われる。」

『大論理学』の「*verteilen*」(ふり分ける)に対応して『資本論』では第4文「*mittheilen*」(伝える)である。「両者」すなわち「頭のなか」で金と関連する「価値」とその「(物における)実存」とが「ふり分けられ(分離され)」, だから「価格(価値の、頭のなかなる金との同等性)を外界に伝える」必要があるのである。

『資本論』第5文は『大論理学』の後半と対応する。「ただ表象された(前に置かれた)だけの *nur vor-gestelltes* 金」は「直接的な自立態」であるから¹⁸⁾, それは「全体・反省した自立態」において「契機としてある(使われる)」。すなわち「金による商品価値の表現が観念的である(存在する) *ist*」とはその「(観念的に)現実存在するもの」であること・「全体・反省した自立態」であることを謂い、「直接的な自立態」(存在)はそうした「全体・反省した自立態」の「契機としてある」。

ここでは度量論の参照が理解を助ける。「外的集合」と「特有的に取りあげられた集合」という「二つの定量」の「相関(比) *Verhältnis*」において、前者は後者すなわち「現実存在するもの」の「契機」としてある。そしてその「指数」は「可変的」であるが「恒常的な仕方の特有化されており」, その意味で観念的に現実存在するからである¹⁹⁾。

『大論理学』第13文「——ここでは全体が両側面の統一・すなわち基礎をつくりなしており、直接的な現実存在は定立された存在としてある。 *hier macht das Ganze die Einheit beider Seiten, die Grundlage aus, und die unmittelbare Existenz ist als Gesetzsein*」：『資本論』第6文・第7文「商品の保護者のだれもが知っているように、彼が自分の商品の価値に価格の形態または表象された金形態を与えても、彼はとうていまだその商品を金に化したわけではなく、また、幾百万の商品価値を金で評価するためにも、現実の金の一片も彼には必要ではない。だから、価値尺度 *Werthmaß*

という機能においては、貨幣は、ただ表象されただけの、または観念的な貨幣として役立つのである。」

「商品の保護者がその商品[・]を金に化[・]したわけではなく、また、現実の金[・]の一片も彼には必要ではない」のは、「ここでは全体[・]（価値尺度という機能）が両側面[・]（全体と直接的な現実存在）の統一・すなわち基礎をつくりなしており、直接的な現実存在（貨幣）は定立[・]された存在（ただ表象されただけの貨幣）としてある」からである。

同様に分子分母の数が与えられなくとも例えば指数 1/2 の比が理解されるのは、「全体[・]（指数）が両側面の統一・すなわち基礎をつくりなしており、直接的な現実存在（分子分母）は定立[・]された存在としてある」からである。

『大論理学』第14文「逆に他方の側面[・]すなわち諸部分[・]の側面では、直接的な・自己において多様な現実存在が自立的な基礎であり、」：『資本論』第8文・第9文「この事情は、きわめてばかげた諸理論を生み出した。価値尺度機能のためには、ただ表象されただけの貨幣が役立つとはいえ、価格はまったく実在的な貨幣材料に依存している。」

「この事情は、きわめてばかげた諸理論を生み出した」には原注「カール・マルクス『経済学批判』、「貨幣の度量単位 *Maßeinheit* にかんする諸理論」、五三頁以下」が付され、次が説かれる。

諸商品は価格としては、ただ観念的に金に、したがって金はただ観念的に貨幣に転化しているという事情は、貨幣の観念的度量単位説を生む動機となった。価格規定にあつては、ただ表象された金か銀かが機能するだけであり、金と銀はただ計算貨幣として機能するだけだから、ポンド、シリング、ペンス、ターレル、フラン等々の名称は、金または銀の重量部分、またはなんらかのしかたで対象化された労働を表現するものではなく、むしろ観念的な価値諸原子を表現するものである、と主張された。それで、たとえば一オンスの銀の価値が増加したとすれば、一オンスの銀はより多くのこういう原子をふくむこととなり、したがってより多くのシリングに計算され、鑄造されなければならない、というのである。（邦訳全集13巻 p. 59）

つまり「きわめてばかげた諸理論」は『大論理学』に謂う「逆」・「他方の側面」を理解することができない。けれども「価格はまったく実在的な貨幣材料に依存し」、それは次に説かれるように「金」のみならず「銀や銅」でもありうるのだから、「諸部分の側面では、直接的な・自己において多様な現実存在が自立的な基礎である」。

『大論理学』第15文「これに反して反省した統一・全体は外的関係にすぎないのである」：『資本論』第10文・第11文「たとえば、一トンの鉄に含まれる価値、すなわち人間的労働の一定分量が、等しい量の労働を含む貨幣商品の表象された一定分量によって表現される。したがって、金、銀、銅のどれが価値尺度として使われるかに従って、同じトンの鉄の価値はまったく異なる価格表現を受け取るのであり、言い換えれば、金、銀、銅のまったく異なる量によって表象されるのである。」

「たとえば、一トンの鉄に含まれる価値、すなわち人間的労働の一定分量が、等しい量の労働を含む貨幣商品の表象された一定分量によって表現される」ということは、「価値」が「反省した統一・全体」だということである。ところが「金、銀、銅のどれが価値尺度として使われるかに従って nachdem Gold, Silber oder Kupfer zum Werthmaß dienen, 同じトンの鉄の価値はまったく異なる価格表現 ganz verschiedene Preisausdrücke を受け取るのであり、言い換えれば、金、銀、銅

のまったく異なる量によって表象される wird in ganz verschiedenen Quantitäten Gold, Silber oder Kupfer vorgestellt」のだから、その「価格表現」において「価値」すなわち「反省した統一・全体は外的関係にすぎない」。

「比」に関して言えば、「指数」が例えば $1/2$ であっても、分子が幾つであるかに従って、比はまったく異なる数によって表現される。さらにこれは或る身長が「フィート」でも「メートル」でも表わされることに対し、また言語事実においては『講義』の次の叙述が想起される。

＜講＞ 音韻変化が、先立つものを斥けずには新しいものをなにつ引き入れないのにたいし (*honōrem* は *honōsem* に取ってかわる)、類推形は必ずしもそれと重なったものの消滅を巻き添えにはしない。*honor* と *honōs* とはしばらくのあいだ共存し *ont coexisté*, いずれを用いても差し支えなかった。(p. 228)

実際『資本論』も次パラグラフでは「金価格」と「銀価格」の「共存」に言及するのである。

テキスト：本稿で使したテキストは本論集前号に記した。

注

1) 『資本論』は次のようにも説く。

＜資＞ どの商品もそうであるように、貨幣はそれ自身の価値の大きさを、ただ相対的に、他の諸商品によってのみ、表現することができる。貨幣自身の価値は、その生産のために必要とされる労働時間によって規定され、等量の労働時間が凝固した、他の各商品の分量で表現される。貨幣の相対的価値の大きさのこうした確定はその産源地での直接的交換取引のなかで行なわれる。それが貨幣として流通にはいるときには、その価値はすでに与えられている。(p. 157)

例えば金が「貨幣として流通にはいるときには、その価値はすでに与えられている *bereits gegeben*」ということの論理は、*in-décor-able* が言語交通にはいるとき「その（諸）要素がとうに与えられている *déjà donnés*」ことのそれと別のものではなからう。「貨幣自身の価値」を表現する一定量の「他の各商品」とは、*décor-er·pardonnable·in-connu* 等の諸語に対当するからである。

2) 『資本論』は説く。

＜資＞ 商品形態の神秘性は、単に次のことである。すなわち、商品形態は、人間にたいして、人間自身の労働の社会的性格を労働生産物そのものの対象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映させ、それゆえまた、総労働にたいする生産者たちの社会的関係をも、彼らの外部に実存する諸対象の社会的関係として反映させるということにある。この“入れ替わり”によって、労働生産物は商品に、すなわち感性的でありながら超感性的な物、または社会的な物に、なる。……（中略）……労働生産物の商品形態およびこの形態が自己を表わすところの労働生産物の価値関係は、労働生産物の物理的性質およびそれから生ずる物的諸関係とは絶対になんのかかわりもない。ここで人間にとって物と物との関係という幻影的形態をとるのは、人間そのものの一定の社会的関係には

かならない。(p. 123)

他方『講義』は説く。

＜講＞ 言語のなかに入るものは、一として言のなかで試みられなかったものはない；そして進化現象はすべてその根源を個人の区域にもつ。この原理は……（中略）……かくべつ類推的改新に適用される。*honor* が *honōs* に取って替わりうる競争者となる前には、さいしょの話手がこれをその場で作り、他人がこれを模倣し、反復し、ついにこれを慣用せざるをえなくすることが、必要であった。(p. 235)

そして「さいしょの話手」の「試み」を「他人」が「模倣し、反復し、ついに慣用する」ということは「人間そのものの一定の社会的関係にはかならない」であろう。

- 3) 「進化の偶生的結果」は『講義』で「音韻進化 l'évolution phonétique の偶生的結果」とある。ただ本稿では音韻変化と類推とが言語進化の二大要因であることに鑑み、「進化の偶生的結果」とした。無論音韻変化と異なり、「類推は文法的秩序のものである」(p. 230)。けれどもその類推に関しては次の事情が考慮されねばならない。

＜講＞ それ「類推」の終局である創造は、さいしょは言にしかぞくしえない；それは単独の話手の臨機の創作である。この現象をさいしょにとらえるにはこの区域、つまり言語の周辺がふさわしい。もっともそこには二つのものを区別せねばならない：1. 産出者形態どうしをむすぶ関係の理解；2. 比較によって暗示された結果、すなわち話手が思想を表現しようとしてその場で作った形態。この結果のみが言にぞくする。(p. 231)

それが「言にぞくする appartient à la parole」ように、類推の結果もまた「偶生的」なのである。

- 4) 『資本論』第二章「交換過程」の冒頭は次を説く。

＜資＞ 諸商品は、自分で市場におもむくこともできず、自分で自分たちを交換することもできない。したがってわれわれは、商品の保護者、すなわち商品所有者たちをさがさなければならない。商品は物であり、それゆえ人間にたいして無抵抗である。もしも商品が言うことを聞かなければ、人間は暴力を用いることができる。言い換えれば、商品をわがものとすることができる。(p. 144)

そして

＜資＞ 商品所有者をとくに商品から区別するものは、商品にとっては他のどの商品体もそれ自身の価値の現象形態としての意味しかもたないという事情である。だから、生まれながらの水平派であり犬儒学派である商品は、他のどの商品とも、たとえそれがマリトルネスよりもずい容姿をしていても、魂だけでなくからだまでも取り替えようと絶えず待ちかまえている。商品所有者は、こうした、商品には欠けている、商品体の具体性にたいする感覚を、彼自身の五感およびそれ以上の感覚でもって補う ergänzt durch seine eignen fünf und mehr Sinne。(p. 145)

商品が「生まれながらの水平派であり犬儒学派である」と同じく、音韻進化もまた「生まれながらの水平派であり犬儒学派である」。『講義』に謂う。

＜講＞ 通時論的事実は、なんらある価値をべつの記号をもってしるすことを目的とするものではない：*gasti* が *gesti, geste (Gäste)* となったという事実は、実体詞の複数をねらったものではない； *tragit*→*trägt* では、おなじウムラウトが動詞屈折に作用している、といったぐあい。それゆえ、通時論的事実はそれじたいのうちに存在理由をもつ事件であって、それから生じうる個々の共時論的帰結は、それとはぜんぜん無関係のものである。(p. 119)

だからここでも「人間は暴力を用い」、通時論的事実を「わがものとする *nehmen*」。すなわち本文に引いた「流用」である。

ともあれこれらのことは、『資本論』『講義』の両者が論理の進展において通底することを示している。

- 5) 私見によれば、「C 現象の解消」5パラグラフの叙述は上に引いた『資本論』『交換過程』章16パラグラフの第9文・第10文に対応している。後者の第1文が「C 現象の解消」1パラグラフに対応し、以下第2文・第3文：2パラグラフ、第4文・第5文：3パラグラフ、第6文～第8文：4パラグラフという対応関係を承けたものである。
- 6) 注2に引いた『講義』叙述にかかわって言えば、「行けられる」は「模倣」ないし「反復」の段階にあると見られる。これに対して「着れる」「食べれない」等の「ら抜き」は既に「慣用」されていると言えようか。
- 7) 注3に引いた『資本論』第二章「交換過程」の冒頭文「諸商品は、自分で市場におもむくこともできず、自分で自分たちを交換することもできない *Die Waaren können nicht selbst zu Märkte gehn und sich nicht selbst austauschen*」は『大論理学』の次の文に論理的な対応をもつ。

＜大＞ 現象は現実存在するものの否定によって媒介された現実存在するものであり、この否定が現実存在するものの存立をなしている。*Die Erscheinung ist das Existierende, vermittelt durch seine Negation, welche sein Bestehen ausmacht.* (現象章「A 現象の法則」冒頭文)

つまり「現実存在するもの」は「自分（現実存在するもの）の否定によって媒介されて」おり、「この否定が現実存在するものの存立をなしている」。したがって「現実存在するもの」は「自己へと反省した自立態」だが、「自分で市場におもむくこともできず、自分で自分たちを交換することもできない商品」がその「現実存在するもの」であることが把握されれば、本文で「貨幣商品」の「自己へと反省した自立態」であることの理解も容易であろう——なおここでも「商品所有者は、こうした、商品には欠けている、商品体の具体性にたいする感覚を、彼自身の五感およびそれ以上の感覚でもって補う」のであった——。

- 8) 以文社版『大論理学』は初版の邦訳であり、したがって度量論を含む存在論の叙述は第二版と異なる場合がある。ただし本文に引いた訳者注は第二版の叙述に対しても妥当する。
- 9) このことはしかし、ヘーゲルとマルクスとの齟齬を意味しない。要点は「外のもの」が如何にして「内のもの」になるのか、にある。「商品は貨幣である」ことの理解の困難、これである。
- 10) 「ここ（20エレのリンネル＝1着の上着）では、種類を異にする二つの商品 A と B、われわれの例ではリンネルと上着とは、明らかに、二つの異なった役割を演じている。リンネルはその価値を上着で表現し、上着はこの価値表現の材料として役立っている。」（『資本論』p. 83）
- 11) 「価値形態は、単に価値一般だけではなく、量的に規定された価値、すなわち価値の大きさをも表現しなければならない。それゆえ、商品 B にたいする商品 A の、上着にたいするリンネルの、価値関係においては、上着という商品種類は、単に価値体一般として、リンネルに質的に等置されるだけではなく、一定分量のリンネル、たとえば20エレのリンネルに対して、一定分量の価値体または等価物、たとえば一着の上着が等置されるのである。」（『資本論』p. 91）
- 12) この文の邦訳は以文社版の方が分かりやすい：「すなわち」それは外的に定立された変化を変化させ、この定量から

他のものをつくりだし、こうしてこの特有化を通じてこの外面性における向自存在として自己を示すのである。

13)『資本論』に曰く。

＜資＞ 一般的等価物の相対的価値を表現するためには、むしろ形態Ⅲをさかさにしなければならない müssen wir vielmehr die Form III umkehren。一般的等価物は、他の商品と共通な相対的価値形態をもっておらず、その価値は、他のすべての商品体の無限の列によって相対的に表現される。こうして、いまや、展開された相対的価値形態または形態Ⅱが、等価物商品の独自の相対的価値形態として現われる。(P. 118)

14) 以文社版『大論理学』での「B 比率化的度量」に相当するのは次の叙述である。

＜大＞ したがって規則は第一に本来的に規定された大きさ・いやむしろ大きさの規定態である。この契機はそれ自身が定量であるのではなく、定量を規定するものとしての質的なものである。第二に規則は外面性・向他存在の側面として定量をもっている。この定量は無関心的な増大および減小という姿をとってあちこちに動く。だが第一の契機への定量の関係がその本質的な存在である、すなわち [定量は] それの無関心態に関しては揚棄されているべきなのである。

そしてこの叙述に対し邦訳者は「規則の両契機は「定量を規定するものとしての質的なもの」と「定量」であるが、両者が並列しているのではなく、前者に重みがかかっているのである」という注を付けている。

15)「没度量 das Maßlose」は『大論理学』に用いられる術語だが、ここでは前注に記したように質的なものに対する没規定的な定量を表わしている。術語との連関を言えば「抽象的な没度量」であって、これがやがて「質的規定性にまで高められる」(岩波版 p. 268) のである。「差し当っては zunächst 一般に没度量的な定量である」と説かれる所以である。

16) 第二版の叙述は次である。

＜大＞ ——この比率的に受け入れられた数量は、それ自身定量であって、また他の数量に、或いは外面的な数量にすぎないものとしての他の数量に依存してもいる。Diese spezifisch aufgenommene Menge ist selbst ein Quantum, auch abhängig von der anderen oder ihr als nur äußerlicher Menge. だから、比率化された数量もまた変化的である。しかし、それだからと云って、この比率化された数量は定量そのものではなくて、むしろ定数として比率化された外面的定量である。Die spezifizierte Menge ist daher auch veränderlich, aber darum nicht ein Quantum als solches, sondern das äußere Quantum als auf eine konstante Weise spezifiziert. この意味で度量は、その定有を比としてもつが、この比の比率的なものは一般に、この比の指数である。Das Maß hat so sein Dasein als ein Verhältnis, und das Spezifische desselben ist überhaupt der Exponent dieses Verhältnisses.

17)「絶対的相関」について『大論理学』(p. 254) は次のように説く。

＜大＞ 絶対的必然性は必然的なものでもなければ、ましてひとつの必然的なものではなくて、必然性である——[すなわち] 端的に反省としての存在である。Die absolute Notwendigkeit ist nicht sowohl das Notwendige, noch weniger ein Notwendiges, sondern Notwendigkeit, — Sein schlechthin als Reflexion. 絶対的必然性は相関である、なぜならそれは区別する運動であり、この運動の [両] 契機そのものが絶対的必然性の全総体性であり、したがっ

てこれらの契機は絶対的に存立しているが、しかしその結果これらの契機が存立することがただ一つの存立であり、区別は開陳する運動の映現にすぎず、そしてこの映現が絶対的なものそのものであるからである。Sie ist Verhältnis, weil sie Unterscheiden ist, dessen Momente selbst ihre ganze Totalität sind, die also absolut *bestehen*, so daß dies aber nur *ein* Bestehen und der Unterschied nur der *Schein* des Auslegens und dieser das Absolute selbst ist.

18) 「表象そのもののうちには、その媒介は存しない。」(『大論理学』 p. 150)

19) 「観念的に現実存在する」ということに関しては、廣松渉の説くところが参考になる。

「個別的・定場所的・変易的」ということがレアルな存在の徴標であるとすれば、物的存在であれ心的存在であれ、いわゆる経験的存在はレアルである。しかるに、所識の意味は「個別的でなく・定場所的でなく・変易的でない」特異な存在、つまり、「普遍的・超場所的・不易的」な存在であり、非レアル＝イデアールな存在と言わざるを得ない。(『存在と意味』第一巻 p. 21)

(未完)